

## 諏訪之瀬島の火山活動解説資料（令和6年1月）

福岡管区气象台  
地域火山監視・警報センター  
鹿児島地方气象台

<sup>おたけ</sup>御岳火口では、噴火活動が続いています。

御岳火口では、14日00時22分に発生した爆発で、弾道を描いて飛散する大きな噴石が火口中心から最大で1.1kmまで飛散しました。このことから、今後も御岳火口中心から1kmを超え概ね2kmの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があるかと判断し、00時55分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から3（入山規制）に引き上げました。その後、御岳火口中心から1km付近まで飛散する大きな噴石は確認されなかったことから、19日11時00分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを3（入山規制）から2（火口周辺規制）に引き下げました。

噴火に伴う噴煙は最高で火口縁上2,000mまで上がりました。

GNSS連続観測では、島の西側深部におけるマグマの蓄積量の更なる増加と推定される変動は認められません。また、島の西側で発生していると推定される火山性地震は少ない状態で経過しています。

御岳火口中心から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

## ○ 活動概況

- ・噴煙など表面現象の状況（図1、図2-①②、図3-①～④、図5-②③）

<sup>おたけ</sup>御岳火口では、噴火活動が継続しています。噴火に伴う噴煙は最高で火口縁上2,000mまで（2023年12月：1,200m）上がりました。14日00時22分の爆発では、弾道を描いて飛散する大きな噴石が火口中心から最大で1.1kmまで飛散しました。その後の噴火による大きな噴石の飛散距離は、火口から最大で約400mでした。爆発は13日以降増加し、月回数は24回でした（2023年12月：0回）。

御岳火口では、夜間に高感度の監視カメラで火映を時々観測しました。

十島村役場諏訪之瀬島出張所によると、鳴動が時々確認され、1日に集落（御岳火口から南南西約3.5km）で降灰が観測されました。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

次回の火山活動解説資料（令和6年2月分）は令和6年3月8日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学及び十島村のデータも利用して作成しています。資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。

・地震や微動の発生状況（図2-③、図3-⑥～⑧、図4、図6-②）

諏訪之瀬島の西側で発生していると推定される火山性地震は月回数で22回（2023年12月：35回）と少ない状態で経過しました。御岳火口付近の爆発地震を除く火山性地震は月回数167回（2023年12月：59回）と少ない状態でした。

震源が求まった火山性地震はありませんでした。火山性微動は主に噴火に伴って発生しました。

・地殻変動の状況（図2-④、図5-①、図6-①）

GNSS連続観測では、島の西側深部におけるマグマの蓄積量の増加と推定される変動は認められません。ナベタオ傾斜計（御岳火口より南西約2.2km）では、火山活動による特段の変化はみられていません。

・火山ガスの状況（図3-⑤）

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、十島村及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり200～300トンで経過していましたが、1月は観測値が得られていません。



図1 諏訪之瀬島 噴火活動の状況  
（上段：1月2日キャンプ場監視カメラ、下段：1月14日寄木監視カメラ）

- ・御岳火口では噴火活動が継続しています。
- ・噴火に伴う噴煙は最高で火口縁上2,000m（2023年12月：1,200m）まで上がりました。
- ・弾道を描いて飛散する大きな噴石は火口中心から最大で1.1km（赤丸内）まで飛散しました。

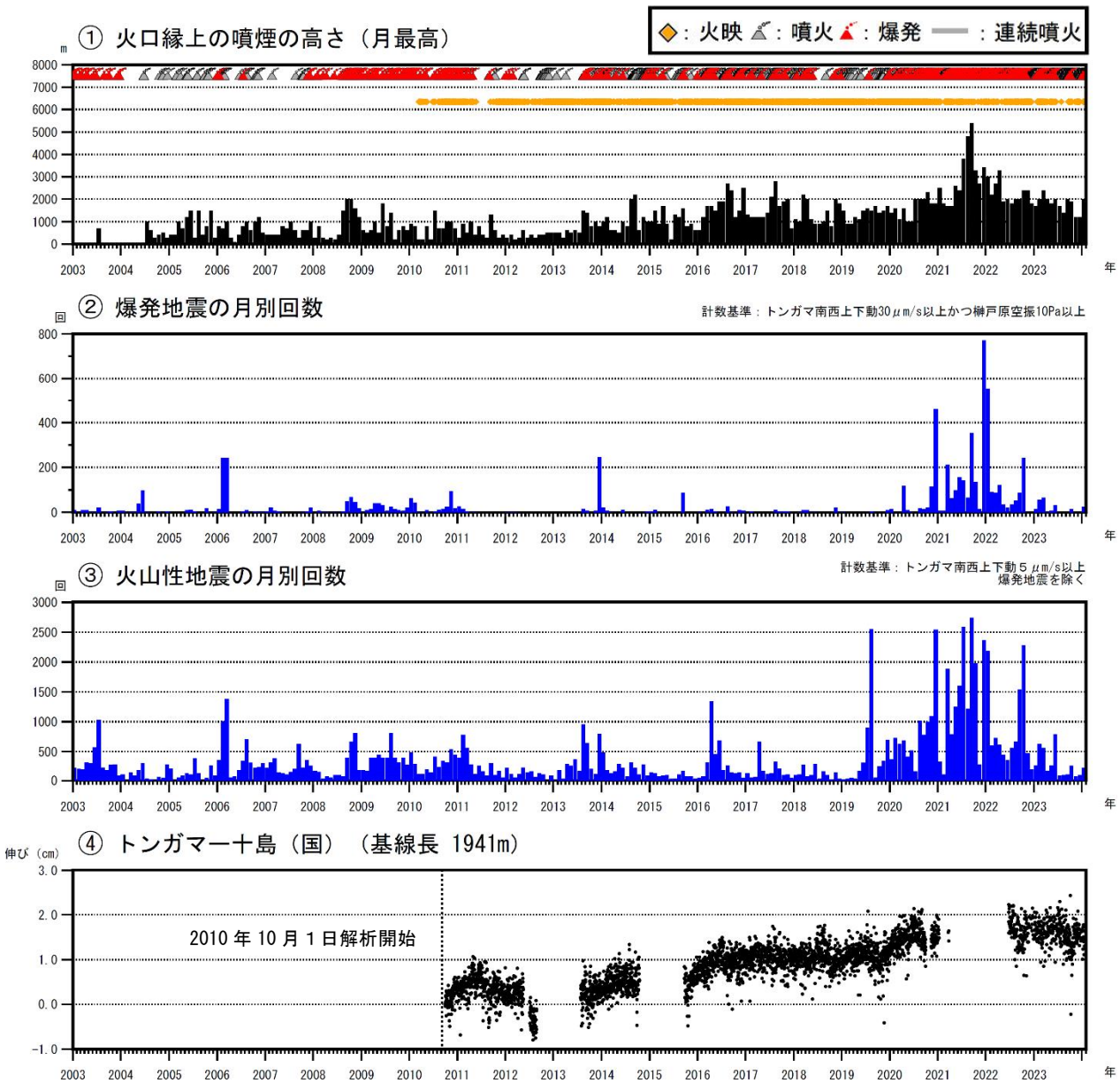


図2 諏訪之瀬島 長期の火山活動経過図（2003年1月～2024年1月）

- ・ 御岳火口では噴火活動が継続しています。
- ・ GNSS 連続観測では、島の西側深部におけるマグマの蓄積量の増加と推定される変動は認められません。

ナベタオ観測点または御岳南山腹観測点で計数している期間があります。

④の基線は図7の①に対応しています。④の基線の空白部分は欠測を示しています。



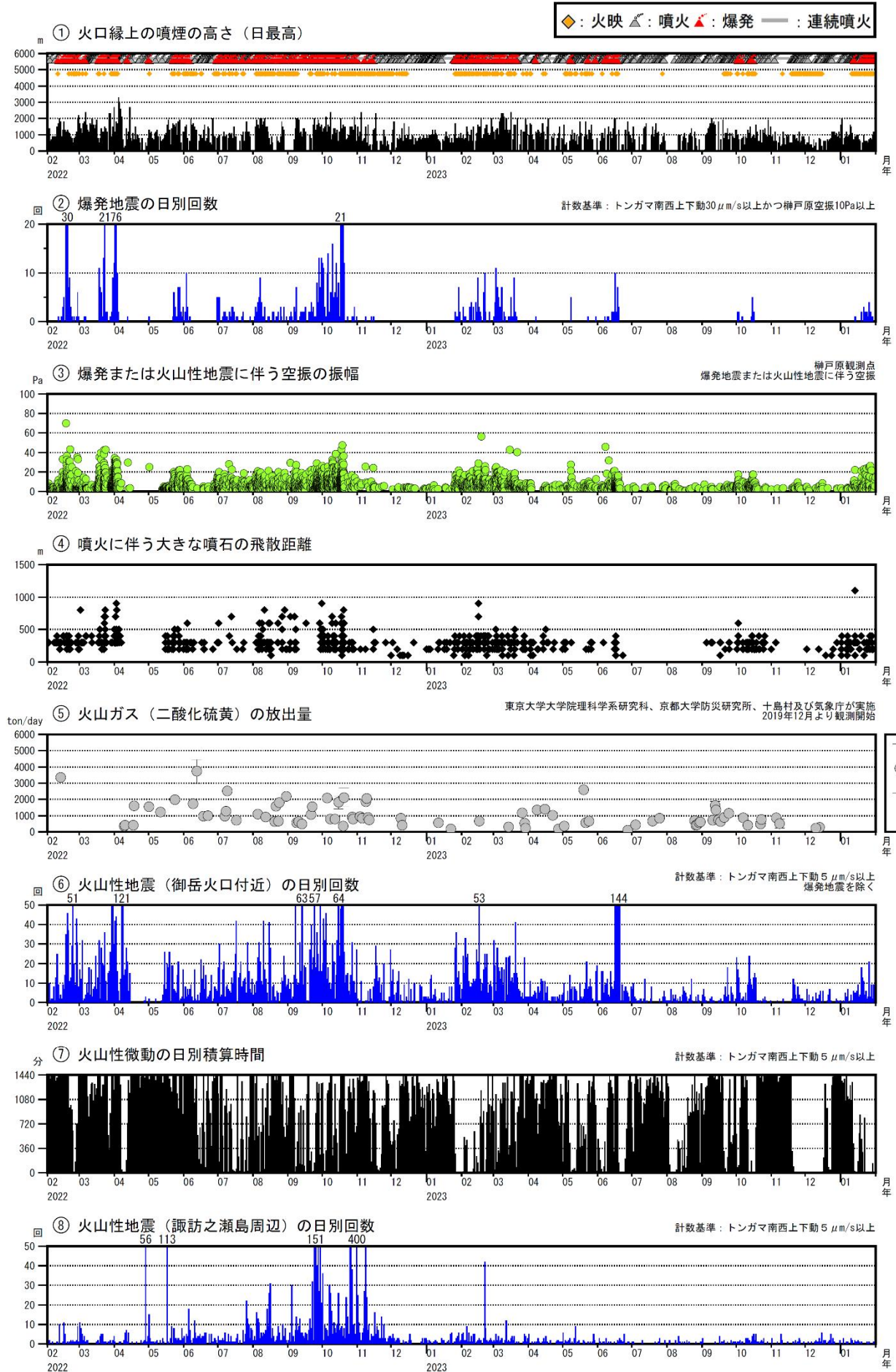


図3（前ページ） 諏訪之瀬島 最近の火山活動経過図（2022年2月～2023年1月）

< 1月の状況 >

- ・噴火に伴う噴煙は最高で火口縁上 2,000m（2023年12月：1,200m）まで上がりました。
- ・爆発は13日以降増加し、月回数は24回でした（2023年12月：0回）
- ・弾道を描いて飛散する大きな噴石は火口中心から最大で1.1kmまで飛散しました。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり200～300トンで経過していましたが、1月は観測値が得られていません。
- ・御岳火口付近の爆発地震を除く火山性地震は月回数167回（2023年12月：59回）と少ない状態でした。
- ・火山性微動は主に噴火に伴って発生しました。
- ・諏訪之瀬島の西側で発生していると推定される火山性地震は月回数で11回（2023年12月：35回）と少ない状態で経過しました。

火山ガス放出量は噴火の直後に計測した場合、値が大きくなり、噴火の発生前に計測した場合には小さくなる傾向があります。

トンガマ南西観測点の地震計の機器障害により、ナベタオ観測点または御岳南山腹観測点で計数している期間があります。

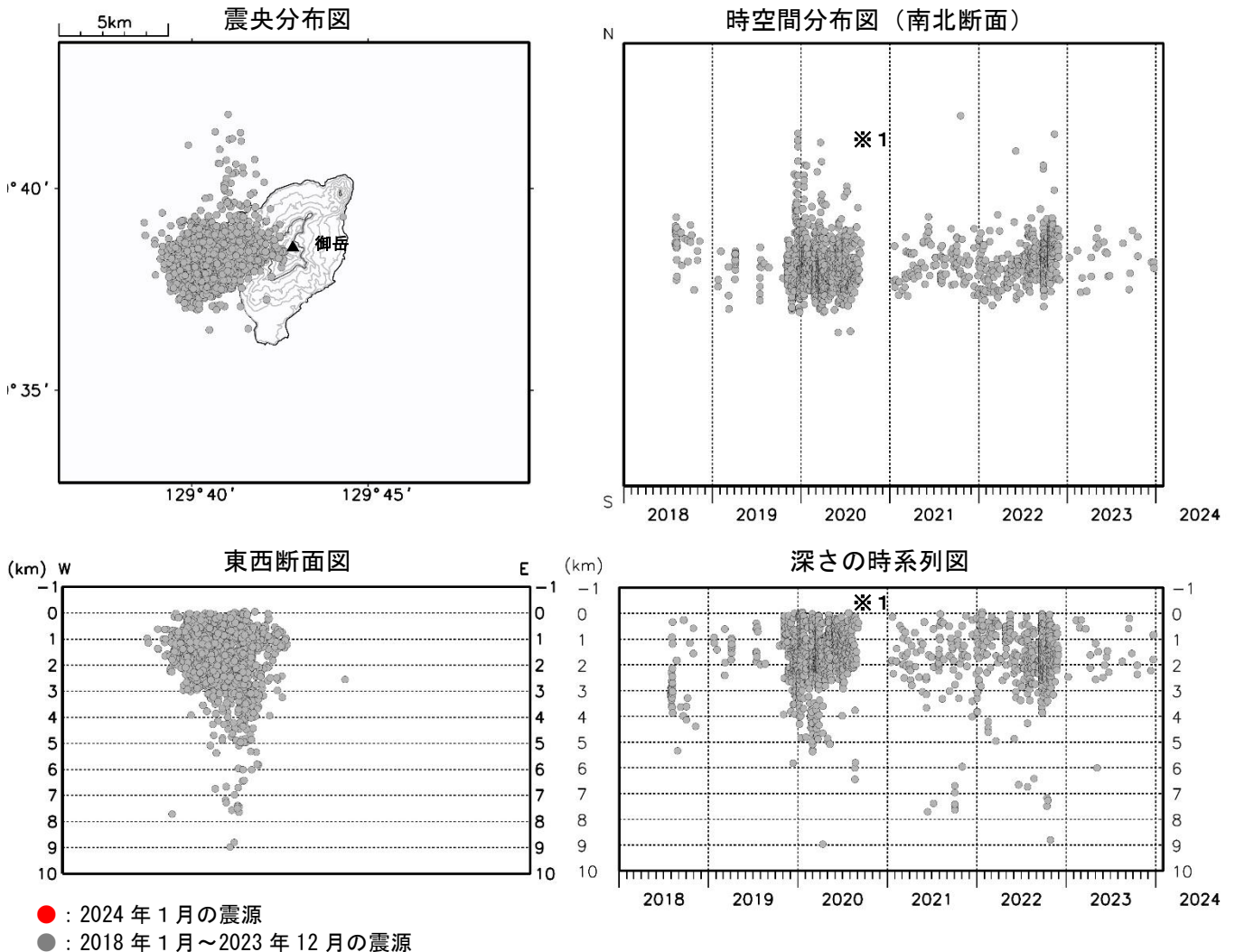


図4 諏訪之瀬島 震源分布図（2018年1月～2024年1月）

< 1月の状況 >

震源が求まった火山性地震はありませんでした。

2018年8月より諏訪之瀬島の震源決定をしています。

※1 2020年9月5日から2021年1月10日まで、一部観測点の障害により検知力や震源の精度が低下しています。

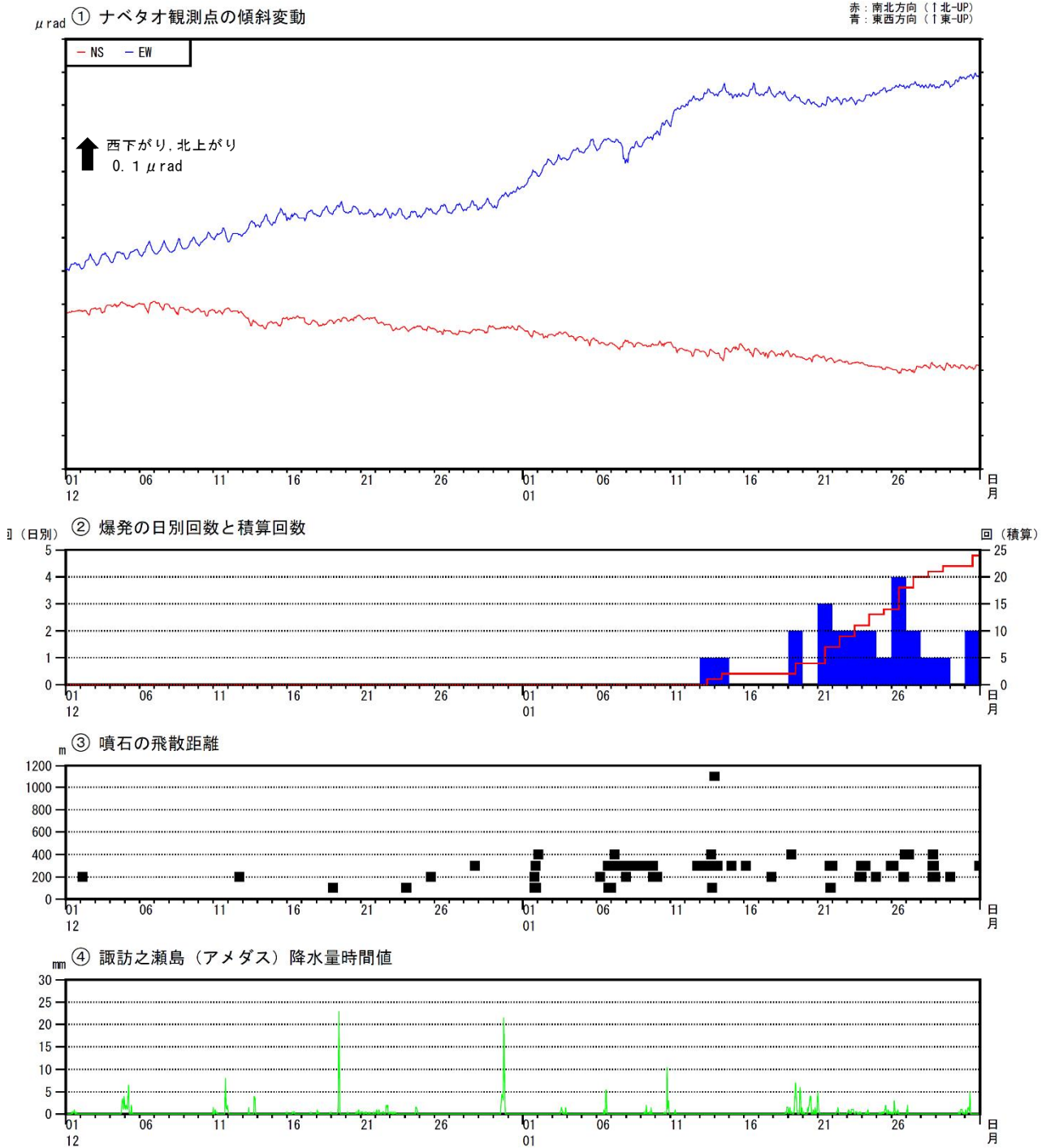


図5 諏訪之瀬島 ナベタオ観測点の傾斜変動と噴火活動（2023年12月～2024年1月）

- ・ナベタオ傾斜計（御岳火口より南西約2.2km）では火山活動による特段の変化はみられていません。
- ・爆発は13日以降増加し、月回数は24回でした（2023年12月：0回）。
- ・弾道を描いて飛散する大きな噴石は火口中心から最大で1.1kmまで飛散しました。

傾斜データは出水期を中心に降水の影響を受ける場合があります。



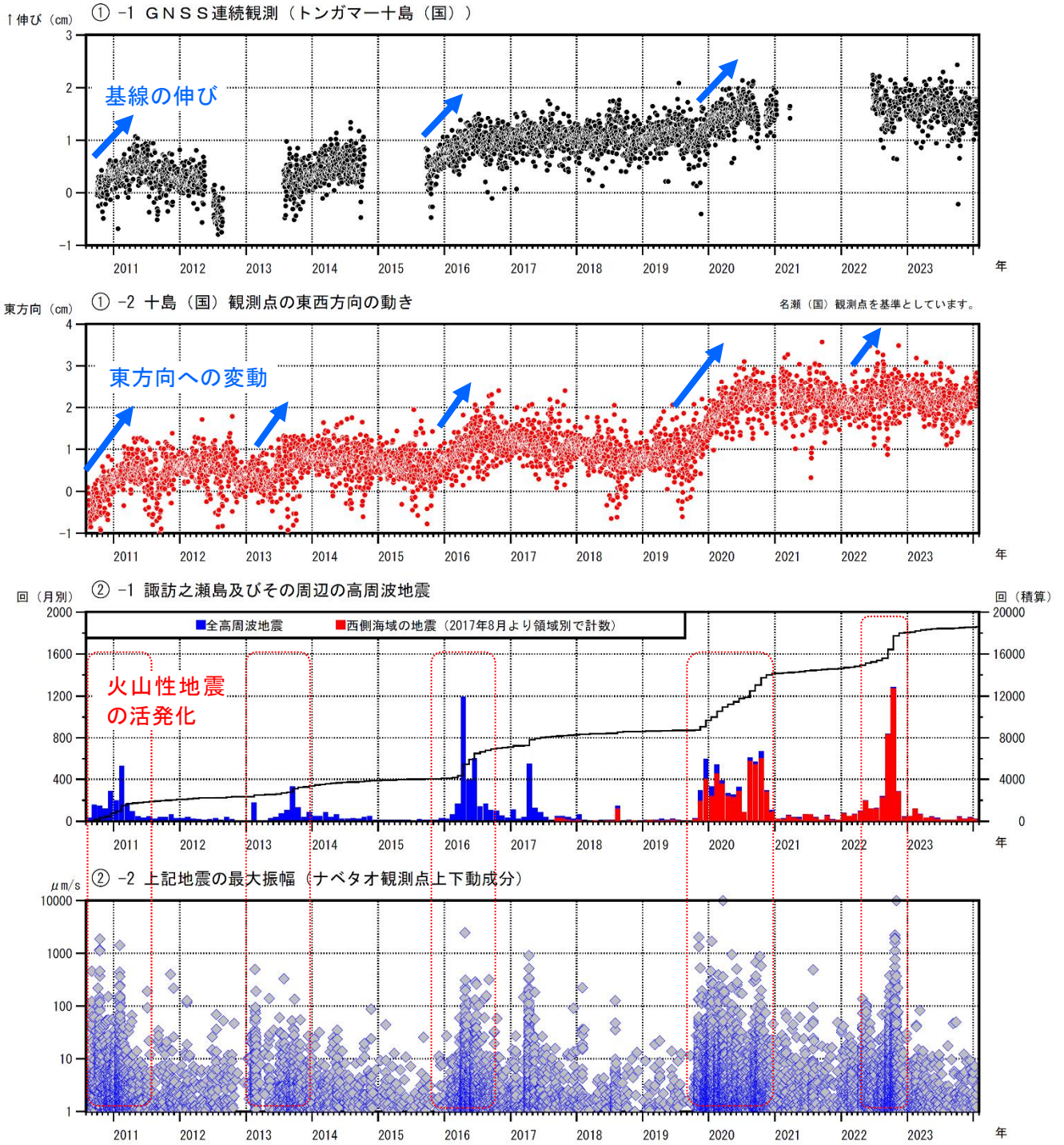


図6 諏訪之瀬島 GNSS連続観測と周辺の火山性地震（2010年8月～2024年1月）

- ・GNSS連続観測では、島の西側深部におけるマグマの蓄積量の増加と推定される変動は認められません。
- ・諏訪之瀬島の西側で発生していると推定される火山性地震は月回数で11回（2023年12月：35回）と少ない状態で経過しました。振幅の大きな火山性地震は発生していません。

①-1の基線は図7の①に対応しています。①-2は島外の観測点(名瀬(国))を固定した観測点の東西の変動を示しています。空白部分は欠測を示しています。

